

動名詞を中心とした世界  
—不定詞および現在分詞との比較を中心に—

伊関 敏之\*

**The World Focused on Gerund**  
— with special reference to the Comparison of Infinitive and Present Participle —  
Toshiyuki ISEKI

**Abstract**

In this paper, we will examine the usage of Gerund, Infinitive and Present Participle. It seems to us that historical linguistics has provided very useful insights especially Gerund. This time, we will look at the various aspects of them: their syntactic, phonological and semantic aspects. At the same time, we will take both diachronic aspects and synchronic aspects into account. Taking a careful consideration on the result of historical linguistics, we will investigate their usage in present-day English based on linguistics.

**序論**

現代英語においては、不定詞の名詞的用法と動名詞とは、ほぼ同じ意味を表すと言われている（例えば、*It began to rain.* と *It began raining.* は、微妙なニュアンスの違いはあるにしても、ほぼ同じ意味を表すということである）。ただし、認知的な側面を強調すれば、例えば、*To see is to believe.* と *Seeing is believing.* とでは、予想以上に大きな違いがあることも事実である（*To listen to music is fun for me.* と *Listening to music is fun for me.*なども同様である）。

また、例えば、*I saw him cross the street.*（私は彼が通りを横切るのを見た）と *I saw him crossing the street.*（私は彼が通りを横切っているのを見た）とでは、意味に違いがあるということもよく知られている。この場合の *crossing* は、文法用語を用いて説明をすれば、現在分詞ということになる。つまり、学校英文法では、*V ing* という形式には、動名詞と現在分詞とがあり、全く同じ形式であるにも関わらず、あたかも別々の事柄であるかのように扱われている

---

\*北見工業大学教授 Professor, Kitami Institute of Technology

のである。確かに、現在分詞は基本的には形容詞として機能するので、動名詞とは働きや意味が異なるのは当然のことであろう。しかし、英語の歴史を振り返ってみると（歴史言語学的な観点から両者を考察してみると）、音韻的・意味的な混交現象が見られるので、大変興味深い。そのことが、現代英語における動名詞・不定詞・現在分詞の意味と用法を考察する上で、大変示唆に富む知見を提供してくれるのである。

「形が異なれば、意味が異なる」というのは、認知言語学の基本的な考え方である。従って、従来ほとんど意味に差がないと言われてきた表現が、実はコミュニケーション上話し手の真意を聞き手に伝える上で微妙な違いを生じさせているのに気がつかないということが多々あるはずである。

先行研究をいろいろと調べてみても、研究者によって意見が異なることも多いということが今回わかってきたのである。

動名詞を中心において、それと不定詞および現在分詞を比較しながら、いわば現代英語の準動詞の意味と用法の重要な一側面について詳細に考察していくことにする。

## 2. 先行研究（動名詞と不定詞の名詞的用法について）

### 2. 1 従来の考え方

石黒監修（1999, pp.192-4）に従って説明を試みる（一部、記述の仕方が筆者の判断によって、原文とは異なる個所もある）。

動名詞と不定詞はともに他動詞の目的語として用いられるが、どちらをとるかは動詞によって決まる。次の4つの分類に従って確認しよう。

- 1、動名詞だけを目的語にとる他動詞
- 2、不定詞だけを目的語にとる他動詞
- 3、動名詞と不定詞でほとんど意味に違いのない他動詞
- 4、動名詞と不定詞で意味の異なる他動詞

#### 1、動名詞だけを目的語にとる他動詞

(1) The man **admitted** *stealing* the bicycle.

(2) I've **given up** *trying* to solve the problem.

(1) その男は自転車を盗んだことを認めた。

(2) 私はその問題を解こうとするのをあきらめた。

(1) の **admit** (**admit-*ing*** (～ということを認める))、(2) の **give up** (**give**

up **-ing** (～をやめる)) のような動名詞だけを目的語にとる他動詞は、不定詞を目的語にすることはできない。

## 2、不定詞だけを目的語にとる他動詞

(1) Roger **has decided to emigrate** to Australia.

(2) She **hopes to find** a new boyfriend soon.

(1) ロジャーはオーストラリアに移住することに決めた。

(2) 彼女はすぐに新しいボーイフレンドを見つけたいと思っている。

(1) の **decide** (**decide+to 不定詞** (～しようと決心する))、(2) の **hope** (**hope+to 不定詞** (～することを望む)) のような不定詞だけを目的語にとる他動詞は、動名詞を目的語にとることはできない。

## 3、動名詞と不定詞でほとんど意味に違いのない他動詞

(1) Sue **started crying** [ *to cry* ] when she heard the news.

(2) He **loves singing** [ *to sing* ] old folk songs.

(1) その知らせを聞いてスーは泣きだした。

(2) 彼は古い民謡を歌うのが大好きだ。

(1) の **start** (<**start -ing**>、<**start+to 不定詞**>いずれも「～し始める」という意味)、(2) の **love** (<**love -ing**>、<**love+to 不定詞**>いずれも「～するのが大好きである」という意味) のような、動名詞と不定詞のどちらが目的語になっても、ほとんど意味に違いのない他動詞である。

## 4、動名詞と不定詞で意味の異なる他動詞

このパターンでは、動名詞が「すでに起こった事柄」や「実際の行為」を表し、不定詞が「まだ起こっていない事柄」を表すことに注意。

### ① **forget**

(1) He **forgot posting** the letter to her.

(2) He **forgot to post** a letter to her.

(1) 彼は彼女に手紙を送ったことを忘れた。

(2) 彼は彼女に手紙を送るのを忘れた。

(1) は<**forget-ing**>の形が使われており、この場合、「～したことを忘れる」という意味になる。一方、(2) は<**forget+to 不定詞**>の形が使われており、この場合は「～することを忘れる」という意味になる。

### ② **remember**

(1) Do you **remember locking** the door when you left?

(2) Please **remember to lock** the door when you leave.

(1) 出かける前にカギをかけたことを覚えていますか。

(2) 出かける時には忘れずにカギをかけてください。

(1) は<remember **-ing**>形で、「～したことを覚えている」という意味になる。(2) は<remember+to 不定詞>で、「忘れずに～する」という意味になる。

### ③ regret

(1) I **regret** *telling* you that you were stingy.

(2) I **regret** *to tell* you that we must reject your offer.

(1) ケチだと君に言ったことを私は後悔している。

(2) 残念ですが、あなたの申し出をお断りしなければなりません。

(1) は<regret **-ing**>で「～したことを後悔する」という意味。(2) は<regret+to 不定詞>で「残念ながら～しなければならない」という意味。

### ④ try

(1) He **tried** *walking* a few steps.

(2) He **tried** *to walk* a few steps.

(1) 彼は試しに数歩、歩いてみた。

(2) 彼は数歩、歩こうとした。

(1) は、<try **-ing**>で、「試しに～してみる」という意味。この動名詞は「実際の行為」を表している。(2) は、<try+to 不定詞>で、「～しようと試みる、努力する」という意味になる。

—石黒監修 1999, pp.192-4

以上、豊富な用例とともに、わかりやすい説明がなされている。上述の説明では、このパターンでは、動名詞が「すでに起こった事柄」や「実際の行為」を表し、不定詞が「まだ起こっていないこと」を表すことに注意という部分が重要である。

このことは、学校英文法においてもきちんと指導すべき事柄として押さえておく必要があると思われる。

ちなみに、動詞が表す意味内容によって、動名詞と不定詞とでほとんど意味に違いのない他動詞から、はっきりと違いが見てとれる他動詞までさまざまである。

例えば、江川 (1991<sup>3</sup>, p.369) には次のような興味深い説明がある。

以下の説明は、後述することになる動名詞と現在分詞の意味の混交にも関わる重要なものである。

begin と start に続く動名詞～ing は、現在分詞的な性格を持っていると言

えよう。つまり、begin to ～は「開始」を示すのに対し、begin ～ing は‘It began to rain’+‘It was (still) raining’= It began raining. のように、「開始+継続」の感じである (Wood, *CEU*, p.38)。このことをさらに例証するために、Palmer (*Verb*, §9.1.2) には次のような start の例が示されている。

He started to speak, but was soon interrupted. (すぐに話を遮られた)

He started speaking, and kept on for hours. (何時間も話し続けた)

この動名詞 (～ing) が進行形の現在分詞 (～ing) と相通じている間接的な証拠としては、一般に begin ～ing や start ～ing は～が動作動詞のときにだけ可能であることがあげられよう。次の2つの文の不定詞は状態動詞だから動名詞とは交換できない。

I began to understand what he really meant.

(彼の真意がわかり始めた)

They started to own a house.

(初めて家を持つことになった)

ー江川 1991<sup>3</sup>, p.369

上述の石黒の説明にもあるように、start ～ing と start+to 不定詞などは、ほとんど意味に違いがないものとして筆者には認識されていた。しかし、ここでの江川の明解な説明により、両者の違いが明らかにされており、大変有益である。

また、安田 (1970, p.113) には、次のような例もある。

動名詞と不定詞では表現の気持が少し違います。

[比較] I like to read a book.

(本が読みたい・・・ある場面の気持)

I like reading books.

(読書が好き・・・場面のない一般論)

(例) I like reading books, but I don't like to read a book now.

(読書は好きですが今は読みたくありません)

ー安田 1970, p.113

安田 (1970) は、中学生向けに書かれた大変有益な本であり、筆者は今でも時折参考にしている。上述の石黒では、ほとんど意味に違いがない例として分類されていた (石黒では、love ～ing と love+to 不定詞が例として挙げられていた)。ここでは、難しい用語は使われてはいないが、以下に述べるように、言いたい内容は岩垣 (1980) とほぼ同じであると言えそうである。つまり、不定

詞は‘動的’で、一時性、未来指向であり、動名詞は‘静的’で、恒久性、過去指向であるというものである。また、動名詞に伴う意味合いについては、場面のない一般論と説明している。

このあたりは後述の大西・マクベイにおいては、不定詞に対する説明にまさに当てはまる内容と言えよう。要するに、全く意見が異なっているということである。

## 2. 2 大津 (2004) の考え方

大変説得力のある説明が、大津 (2004, p.62) によってなされている。

「動名詞は、もうすでにしていること、あるいは、今もしていることについて述べる場合に使うと書きました。なぜかという、今していることについて述べる**進行形と同じ-ing形（現在分詞）**を使っているからです。

一方、不定詞は（今そのことをしているのではなく）これからそのことをする場合に使うというのはなぜでしょう。

その理由を知るためには、英語の歴史をさかのぼってみる必要があります。歴史的には、不定詞を表す **to** は「～へ」という方向を表す前置詞の **to** と同じ源から発しています。そこで、不定詞の表す意味は、その動作の方向へ向かう、つまり、（今そのことをしているのではなく）これからそのことをする、ということになるのです。

意外に思われる方もいるでしょうが、それが歴史の面白さというものです。」と書かれている。

ここでは、特に不定詞の表す意味について、歴史言語学の観点からの説明の有用性を強調していて、大変興味深い。現代英語の意味の解釈において、通時的な視点を持つことの重要性がうかがえる。ただし、動名詞の方の説明に対しては、少し疑問が残る。後述のように、動名詞が進行形と同じ-ing という形式をとっているので、今もしていることについて述べる場合に使われるということに関しては、筆者にも異論はない。しかし、もうすでにしていることについて述べる場合にも使われるということに関しては、-ing という形式からだけでは全く判断できないからである。その点についての説得力のある説明が是非ほしいところである。

大津の述べていることの要点をまとめると、次のようになる。

◎動名詞を使う時—もうすでにしていること、あるいは、今もしていることについて述べる場合（過去・現在指向）。

◎不定詞を使う時— (今そのことをしているのではなく) これからそのことをするという場合 (未来指向)。

ここでの過去・現在指向という用語は、筆者が独自につけたものである。

### 2. 3 岩垣 (1980) の考え方

さらに、岩垣 (1980, p.61, 77) には、◎不定詞の名詞用法と動名詞という項目があり、興味深い。主に「百聞は一見に如かず」という諺を用いながら、両者の違いを説明している (引用の内容はそのままではなく、筆者による解釈によりまとめたもの)。

「Seeing is believing. = To see is to believe. (見ることは信じることである。) と解されているが、細かく言えば、動名詞を用いると‘Seeing as a general rule is followed by belief.’ (見ることは概して信ずることになる。) という一般的な叙述であるのに対し、不定詞を用いると‘Seeing is immediately followed by believing.’ (見ればすぐ信じるようになる。) という特定の事柄を述べることになる。動名詞と不定詞のこの差異は、言葉を変えると、

動名詞は、‘静的’で、恒久性、過去指向

不定詞は、‘動的’で、一時性、未来指向

とも言える。

従って、次のような特定の人物 (her) を念頭に置いた

To have once seen her was to long to behold her again.

(彼女に一度会うと再び見たくないのであった。)

など、将来の内容を含んでいるため、動名詞では表現することはできない。

では、次の例はどうであろうか。「昔の小学生にとって、鉛筆を小刀で削ることは重要な自己学習であった。掛け算の九九を覚えるのと同じ、あるいはそれ以上の意味を持っていた。彼らは感覚を通じて木を知り、その香りをかいだ。それは原始の洞窟の中で、父や兄の作業を見よう見まねで矢をけずり、弓をつくっていた子供たちと共通する経験だっただろうと思う。」—村松貞次郎『大工道具の歴史』

上の文を英語に訳す場合、下線の部分は、「(これから) 鉛筆を小刀で削れば、それは重要な自己学習になる」という意図で書かれたものではなく、「かつては、そして今も、鉛筆を小刀で削ることは重要な自己学習であったし、今もそのはずだ。」という恒久的な事実として意図されているので、

For schoolboys in former days, it was an important part of self-education to

*sharpen pencils with a knife.*

ではなく、to sharpen → sharpening [動名詞] にしなければならないと、日本文学の翻訳家ジョン・ベスター氏は指摘している。

動名詞と不定詞とのこの差異は、我々が想像する以上に重要な要件で、決して忘れてはならないことの一つである。」と書かれている。

ここでは他動詞の目的語としての用法ではなく、主語 (S) と補語 (C) の位置に出てきている動名詞と不定詞の用法になっているところに注意する必要がある。

また、動名詞は‘静的’であり、不定詞は‘動的’であると述べているところが目を引くところであるが、この意見とは異なった考えを持っている研究者もいるので、次にその点について言及しておくことにする。

## 2. 4 大西・マクベイ (2008) の考え方

大西・マクベイ (2008, pp.111-6) の記述に基づいて、説明していく (内容は筆者が少し再構成している)。

名詞として扱われる動詞-ing 形と to 不定詞の区別。どちらも「～すること」と訳されますが、実はずいぶん体感がちがいます。

→A : Just back from the office. I hate (**working** / to work) on a Sunday.

B : Right. I hate (**to work** / working) on a Sunday, too.

A : 仕事から帰ってきたところ。日曜日に働くの、ものすごくいやだよ。

B : そうだよな。僕だって日曜日に働くのいやだよ。

どちらも「日曜日に働くこと」という日本語訳。どちらを選んでも「まちがい」というわけではありません。けれども、使い方がズレていることがわかりますね。

### A-ing はいつもイキイキ

I hate **working** on a Sunday. (日曜日に働くのはイヤだ)

-ing は「イキイキとした行為が行われている」。名詞として使われたからとその気持ちが変わってしまうわけではありません。イキイキとした行為が強く意識されている、それが名詞として使われる-ing なのです。この文は単に一般論として「働くことが嫌いです」ではありません。働いている、その様子がリアルに想像されているのです。仕事から帰ったばかりのAさんが「仕事はイヤだ」と言う時、頭の中では「仕事」がイキイキと展開していますよね。だからこそ、ここでは **working** がより好まれるというわけです。



## B to は漠然

I hate **to work** on a Sunday. (日曜日に働くのはイヤだ)

一方 to 不定詞には-ing のような「出来事がイキイキと展開する感触」はまるで感じられません。単なる一般論。この文は「日曜日の仕事はイヤです」と、漠然と一般論を述べているにすぎません。Bさんは自分が日曜日に仕事をしてきたわけではありません。だからこそ to 不定詞がより適任なのです。

to 不定詞がこうした意味合いをもつのは、その形と無縁ではありません。to は「指し示す」単語。そこに動詞の原形が加わっています。動詞原形は単に「～する」、-ing のように何かが起こっていることを表す形ではありません。ここから一名詞として扱われる to 不定詞には一何か漠然とした、一般的な状況を指し示している感じが醸し出されているのです。

→ **To smoke is dangerous for your health.**

(喫煙は健康に悪い)

**To use drugs is against the law.**

(麻薬使用は法律違反です)

どちらも具体的に何かが起こっていることを表してはいませんね。漠然と「そうしたこと」と一般論を述べているにすぎません。

→ a. I like **playing with my kids in the park.**

(公園で子どもと遊ぶのが好き)

b. I like **to play with my kids in the park.**

(公園で子どもと遊ぶのが好き)

ここで注意しなければいけないのは、-ing はその場で実際に起こっていなければならないということではありません。肝心なのは、「リアルに起こっている感じがする」ということ。そんな体感を伴っているということです。話し手は子どもと遊ぶ様子をリアルに思い浮かべながら述べているのです。to 不定詞は単に「そういうことが好きなのです」ということ。

-ing の「イキイキ」、to 不定詞の「漠然一般論」、その体感さえ身につけておけば、この2つは自然に使い分けることができます。

—大西・マクベイ 2008, pp.111-4

大変有益な指摘である。上述の岩垣 (1980) とは、かなり主張が異なっていることに注意されたい。岩垣では、動名詞は‘静的’であり、恒久性、過去指向であると述べられているが、大西にはそのような感じがまるでない。この後筆者が論じていくように、動名詞の-ing 形と現在分詞の-ing 形とが音韻的・意

味的に混交しているという主張を裏付けることになる。

岩垣も大西も共に、ネイティブ・スピーカーとの共同作業ということに特徴がある研究者であるにもかかわらず、主張にかなりの隔たりがあるということは、とても興味深い。

ただし、大津が言うように、動名詞は現在・過去指向であるという主張も筆者は採用することにする。その上で、大西・マクベイが述べているような「イキキ感」が動名詞には存在するという主張を筆者は展開する。

そのことを歴史言語学の成果に基づいて、この先立証していくことにする。一方、不定詞の意味する内容については、筆者は大西・マクベイとは少し違った見方をしているので、そのことも検討していく。つまり、不定詞は単に「漠然とした一般論」を述べているだけではなく、岩垣や大津でも述べられているように、‘動的’であり、一時性、未来指向も備わっているという主張を支持する。なぜなら、不定詞は動名詞とは違って、ある意味ではいわば「オールラウンドプレイヤー」であるからである。

次の項では、その辺の事情について、歴史言語学によって得られた知見も十分に取り入れながら、検討していくことにする。

### 3 不定詞と動名詞の統語的特徴

#### 3. 1 不定詞の特徴

以下、中尾・児馬編（1990, pp.179-80）に基づいて説明する。

PEでは、形態的には to の付かない原形不定詞と、to の付いた to 不定詞の2種類の不定詞 (infinitive) が用いられている。原形不定詞は (1b) のような使役動詞や知覚動詞などの補部にも起こるものの、主として (1a) のような助動詞の後ろに生じ、かなり限られた環境で用いられるのに対し、to 不定詞は、(2) のように、それ以外の多様な環境で用いられる。

(1) a. I can swim.

b. I made him do the job.

I saw him run.

I helped him do the job.

(2) a. To smoke like that is dangerous. [名詞用法]

b. Give me something to drink. [形容詞用法]

c. John went to America to study English. [副詞用法]

- d. This book is easy to read. [Tough—構文]
- e. For Mary to go there would surprise John. [主語付き不定詞]
- f. I believe John to be honest. [不定詞付き対格構文]
- g. It is necessary for us to read his essay. [外置構文]
- h. To tell the truth, ... [独立用法]

特に、to 不定詞は機能的にも名詞、形容詞、副詞用法など多岐にわたっており、PEの文法におけるその役割は準動詞の中でも特に重要であり、その歴史的発達を知ることは大変興味深い。

—中尾・児馬 1990, pp.178-9

以上の説明を見てもわかるように、PEにおいては、to 付き不定詞の方が無標であり、ゼロ不定詞の方は有標であるとされている。しかし、歴史的に見れば、事実は逆である（詳細は、上掲の本参照）。

つまり、不定詞がPEにおいてはオールラウンドプレーヤーとして機能しているということの例として理解できれば、ここでは十分である。

### 3. 2 動名詞の特徴

以下、中尾・児馬（1990, pp.187-91）に基づいて説明する。

PEの動名詞（gerund）は、その名が示すように動詞的性質と名詞的性質を合わせ持っている準動詞の1つである。現在分詞とは、形態的に同じ-ing という接辞を持ち、かつ、動詞句の内部構造を持っているために、両者の区別は文全体の中でいかなる機能を果たすかによって判別するしかない。例えば、(1)、(2)のように斜字体の部分が文全体の主語や目的語として機能する場合は動名詞で、(3)、(4)のように副詞や形容詞として主節や先行する名詞を修飾する場合は現在分詞である。

(1) *Watching television* keeps them out of mischief. [主語]

(2) He enjoys *playing practical jokes*. [動詞の目的語]

(3) *Leaving the room*, he tripped over the mat.

(4) The person *writing reports* is my colleague.

このようなPEの動名詞構造は、初期の英語にすでにあったわけではなく、長い歴史の中で成立したもので、その変化の過程には興味深い点が多くある。

—中尾・児馬 1990, p.187

要するに、PEの動名詞と現在分詞の特徴（特に、意味的特徴）を考察するに際しては、言語の通時的視点（歴史言語学的視点）が是非とも必要であると

いうことである。

次に、動名詞の歴史的変遷について見ていくことにする。以下の説明を見てもわかるように、大変興味深い事実が述べられている。動名詞は元来名詞であったが、元来動詞的な性格を持つ不定詞や現在分詞の影響を受けながら、動詞機能を発達させていったものである。そして、今日では、名詞的性格と動詞的性格の2つを合わせ持っているということである (cf. 中尾 1989, pp.140-1)。

### 3. 2. 1 名詞的性質から動詞的性質の獲得

以下、中尾・児馬編 (1990, pp.187-8) および児馬 (1996, pp.104-8) に基づいて見ていく。

OEでは今日、動名詞(構造)と呼ばれるものは to 付き不定詞によって代行されており、動詞に-ing を付加した形は一種の派生名詞(以下、ING 名詞)でしかなかった。この ING 名詞は、機能はもちろん、形態的、音韻的にも現在分詞 V-ende (これがPEの-ing に相当する)と全く別物であり、今日の動名詞が持っている種々の動詞的性格を全く持っていなかった。

例えば、次の例を見てみよう。

(1) John's refusing the offer suddenly surprised us. (動名詞)

(2) John's sudden refusal of the offer surprised us. (派生名詞)

(1)は動名詞で、(2)は動詞に特定の派生接辞(derivational suffix: -al, -ment, -tion など)をつけて名詞を派生させるもので、派生名詞(derived nominal)と呼ばれる。

今日の動名詞構造の起源と考えられているものは、OEのING名詞であって、今日の派生名詞(2)に近い構造であった。この純粋に名詞的な構造を維持しながら、他方で、(i)直接目的語を of なしで従える、(ii)副詞と共起する、(iii)完了形、受動態をとりうる等、種々の動詞的性格を獲得していくうちに、今日の動詞句を含んだ(1)の動名詞構造を発達させたのである。

ここで、動名詞の動詞的特徴と派生名詞の名詞的特徴を比較対照してみよう。

**動名詞の動詞的特徴(派生名詞の名詞的特徴)**

[1] 目的語を直接取る (refusal は of を取るからその意味で名詞的)

[2] 副詞と共起する (refusal は形容詞 sudden を取るから名詞的)

[3] 完了 (have) と共起する (refusal は完了にできないから名詞的)  
(John's) having refused ...

[4] 受け身 (be) と共起する (refusal は受け身にできないから名詞的)

( the offer's ) being refused by John

さらに、動名詞の名詞的な特徴を次に示す。

[1] 主語を属(所有)格(John's)で表す。(refusal も同様)

[2] 動名詞構造全体が文全体の中で名詞句が生ずる位置に起こるので、名詞句の働きをする。(refusal も同様)

PEでは動名詞の統語的特徴として、この動詞的特徴と名詞的特徴の両方を兼ね備えているということが重要である。

—中尾・児馬編(1990, pp.107-8); 児馬(1996, pp.104-8)

### 3. 2. 2 現在分詞の影響

これから述べるのが、今回の論考を考える上で一番重要になる考え方である。児馬(1996, p.106)に基づいて見ていこう。

この新しい動名詞構造(cf. 3.2.1の(1))を引き起こす引き金となったと考えられるのが、OEの現在分詞語尾-endeとING名詞の語尾-ingとの音的融合である。つまり、[ind] > [in]という分詞の変化と、[iŋg] > [in]というING名詞の変化によって両者が同音になったことである。結果的には分詞が-ingという音と形態を、ING名詞から譲り受け、一方、ING名詞は動詞句の内部構造を持つという分詞の統語的性質(分詞-endeは、その語尾を-ingに変える前から、ofなしで、直接、対格目的語を従えていた)を譲り受けたことになる。つまり、同じ語尾を持つ、PEの動名詞と現在分詞は、OEのING名詞と現在分詞が、それぞれの属性の一部を交換し合った結果、生まれた現象とみなすことができる。

—児馬 1996, p.109

上記の説明は、今回のようなPEの英文法研究をする上においても、大変示唆的かつ有益な情報となっている。

今回は言及できなかったが、児馬(1996)には動名詞、不定詞、現在分詞の史的発達についての大変有益な情報が満載されているので、是非参照されたい。

次章では、現代英語においては、-ingという同じ形をしている動名詞と現在分詞が音韻的・意味的混交を起こしているという自説を展開することにする。

## 4 動名詞と現在分詞の音韻的・意味的混交について

私見としては、上述のような特徴のあるPEの動名詞と現在分詞とが、OEのING名詞と現在分詞がそれぞれの属性の一部を交換し合った結果生まれた現象である以上、お互いに意味的な接点が出てきても別に不思議なことではないということである。すなわち、両者の間で意味的な混交が起こっているということである。換言すれば、動名詞が不定詞の名詞的用法と同様に文中において名詞として機能している場合においても、意味の根底には現在分詞（～している）に付随しているような「イキイキ感」を含意している場合が多いということである。

## 5 結論と今後の課題

今回は動名詞を中心に、不定詞と現在分詞との比較に焦点を当てながらいろいろと考察してきた。

ここで私見をまとめておくと、次のようになる。

◎不定詞の表す意味・・・オールラウンドプレーヤーで‘動的’、一時性未来指向＋漠然とした一般論

（オールラウンドプレーヤーである以上、多機能かつ多義である）

PEの統語的特徴として、不定詞は動名詞よりも動詞に近い性質を持つ。

◎動名詞の表す意味・・・歴史的には、名詞的性質→動詞的性質の獲得ということ。

過去・現在指向

‘静的’、恒久性・「イキイキ感」。

現在指向－「イキイキ感」

過去指向－‘静的’、恒久性＋‘動的’「イキイキ感」の併存

過去の事柄というのは動きがない（つまり、‘静的’である）が、気持の上では「イキイキ感」がある（つまり、‘動的’である）ということもありうる。

(1) I remember [ ×am remembering ] *posting* [ having posted ] your letter. = I remember ( that ) I posted your letter. あなたの手紙を出したことを覚えている

－小西・南出 2006<sup>4</sup>, p.1613

私が手紙を出した場面をありありと（イキイキと）思い出しているのであれば、‘動的’「イキイキ感」が醸し出される。

(2) Seeing is believing.

動名詞を中心とした世界  
—不定詞および現在分詞との比較を中心に—

イキイキとこの諺が当てはまる場面を思い出している（前述の大西の解釈）ということもありうるであろうが、このような諺の持つ性質としては、‘静的’、恒久性ということ（前述の岩垣の解釈）の方がより自然であると言えよう（cf. 2. 3）。

換言すれば、動名詞の表す意味は、現在指向の時だけではなく、過去指向の時においても、かなり‘動的’「イキイキ感」というニュアンスがついて回っているとも言えそうである。

これまで準動詞（動詞に準ずる働きをするもの）として、動名詞、不定詞、現在分詞についていろいろと考察してきた。統語的・意味的な振る舞いについても、それぞれ独特で異なったものであることがわかった。

それから、動詞から純粋な名詞に至るまでに段階を設けるとすると、次のようになるであろう。

動詞→現在分詞→不定詞→動名詞→純粋な名詞

今までの考察からもわかるように、不定詞は動名詞よりも動詞に近いところに位置しているので、‘動的’であり、動名詞は名詞により近いので‘静的’であるという説明にも納得がいくところである。ただし、動名詞は、現在分詞との音韻的・意味的混交現象により、「イキイキ感」に基づく‘動的’な側面も多々持っているということである。

さらに、上記の矢印においては、現在分詞が不定詞よりも動詞に近いところに位置していることに注意を要する。現在分詞というのは、形容詞として名詞を限定する働き（限定用法）と **be** 動詞+**Ving** 形という時の **Ving** に相当し、後者は分類上は動詞扱いである。

さらに、副詞句の働きをして分詞構文を構成することもある。つまり、現在分詞は、主な働きとしては、形容詞、動詞、副詞ということになる。一方、不定詞の方はどうかというと、名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法と **variety** に富んでいる。それに加えて、**to** 不定詞と **to** の付かない不定詞（原形不定詞）の2種類がある。原形不定詞も考慮に入れると、これはまさに動詞そのものであるということになる。つまり、言ってみれば、不定詞は「オールラウンドプレーヤー」である。要するに、この両者の性質を比べてどちらが動詞により近いかということを決断することは難しいという側面もあるが、不定詞にあるいろいろな用法のうち名詞的用法も存在する以上、不定詞は現在分詞よりも名詞に近い場所に位置付けておいた。ここでは便宜上上記のような位置付けにしておいたが、この辺の事情についても、今後はさらに研究を進めていくことが必

要であろう。

今後の課題としては、次のようなことが言える。

今回は、理論的アプローチと感覚的アプローチの両面から考察してきた。実際のコミュニケーションの場面においては、今回の筆者の行ったように、両方の成果を有効に取り入れて理論を構築することが必要不可欠であるように思われる。もう少しすっきりとした基準で分析（分類）ができれば、なおよいであろう。

また、これまで詳しく述べてきたような歴史言語学上の研究成果については、大変興味深いものがあり、現代英語の文法（語法）研究にも十分に応用できる有用性を備えていることは明らかである。ただし、上述のような研究成果は、今だに歴史言語学上の大きな謎（問題点）の一つになっているようであるので、さらなる成果が今後応用できれば、もっと明解な主張が展開できるようになるかもしれない。

## 参 考 文 献

- 江川泰一郎（1991）. 『英文法解説—改訂三版—』. 東京：金子書房.
- 石黒昭博（監修）（1999）. 『高校総合英語 Forest（フォレスト）』. 東京：桐原書店.
- 岩垣守彦（1980）. 『英語の要点／中』. 静岡：増進会.
- 小西友七，南出康世（編）（2006）. 『ジーニアス英和辞典第4版』. 東京：大修館書店.
- 児馬修（1996）. 『ファンダメンタル英語史』. 東京：ひつじ書房.
- 中尾俊夫（1989）. 『英語の歴史』. 東京：講談社.
- 中尾俊夫，児馬修（編著）（1990）. 『歴史的にさぐる現代の英文法』. 東京：大修館書店.
- 大津由紀雄（2004）. 『英文法の疑問恥ずかしくてずっと聞けなかったこと』. 東京：NHK出版.
- 大西泰斗，ポール・マクベイ（2008）. 『NHK新3か月トピック英会話ハートで感じる英語塾～英語の5原則編～』. 東京：NHK出版.
- 安田一郎（1970）. 『NHK続基礎英語英語の文型と文法』. 東京：日本放送出版協会.